

女子高校生における『援助交際』の背景要因⁷

櫻庭隆浩¹ 松井 豊² 福富 護³ 成田 健一³

上瀬 由美子⁴ 宇井 美代子⁵ 菊島 充子⁶

本研究は、『援助交際』を現代女子青年の性的逸脱行動として捉え、その背景要因を明らかにするものである。『援助交際』は、「金品と引き換えに、一連の性的行動を行うこと」と定義された。首都圏の女子高校生600人を無作為抽出し、質問紙調査を行った。『援助交際』への態度（経験・抵抗感）に基づいて、回答者を3群（経験群・弱抵抗群・強抵抗群）に分類した。各群の特徴の比較し、『援助交際』に対する態度を規定している要因について検討したところ、次のような結果が得られた。1)友人の『援助交際』経験を聞いたことのある回答者は、『援助交際』に対して、寛容的な態度を取っていた。2)『援助交際』と非行には強い関連があった。3)『援助交際』経験者は、他者からほめられたり、他者より目立ちたいと思う傾向が強かった。本研究の結果より、『援助交際』を経験する者や、『援助交際』に対する抵抗感が弱い者の背景に、従来、性非行や性行動経験の早い者の背景として指摘されていた要因が、共通して存在することが明らかとなった。さらに、現代青年に特徴的とされる心性が、『援助交際』の態度に大きく関与し、影響を与えていることが明らかとなった。

キーワード：『援助交際』、性行動、売春、非行、現代青年

問題と目的

本研究は、現代女子青年の性的逸脱行動として『援助交際』をとらえ、その背景要因を明らかにするものである。

『援助交際』に関する議論や論説は多いが、宮台(1998)が指摘するように、客観的データに基づいているものは非常に少ない。『援助交際』の実態を調査したデータとしては、東京都生活文化局(1996)がある。同調査によると、東京都の高校生女子において、『援助交際』の経験を有する者の割合は4.6%であった。彼女たちの『援助交際』を行った理由としては、「お金がもらえるから」が、53.9%にのぼっていた。しかし、この調査

は実態調査にとどまり、背景要因に関する分析は行われていない。また、回答者に対して『援助交際』の定義が明示されていないまま調査が行われている。

本研究に先立ち、福富(1997)は、首都圏の女子高校生30人に対し、『援助交際』に関する面接調査を行っている。同調査によると、被面接者の『援助交際』の捉え方は各々異なっており、実証研究において『援助交際』の定義を規定する必要性が指摘された。

矢島・宮台(1997)によれば、『援助交際』という用語には3つのルーツがある。第1は、1980年代前半の、愛人バンクにおける「長期的愛人契約」を意味するものである。第2は、1990年代前半の、ダイヤルQ²等に関して「売春」を意味するものである。第3は女子高生デートクラブの間で使われたもので、「売春」行為または「非売春」行為を意味するものである。第3の意味における『援助交際』について矢島・宮台(1997)は、必ずしも売春を意味するものではないものの、近年売春化の傾向を強めてきていると指摘している。

以上の研究をふまえ、本研究では、『援助交際』を「金品と引き換えに、一連の性的行動（喫茶につきあったりデートをしたり、性行為をすること）を行うこと」と定義する。すなわち、『援助交際』は金品と引き換えに性行為を行うという場合において、売春と同義となるが、金品と引き換えに喫茶につきあい、デートを行う場合には、従来の売春とは異なる側面も持っている⁸。

従来の非行研究の知見では、女子少年においては、

¹ 横浜国立大学大学院教育学研究科 sakuraba@da.mbn.or.jp
〒240-8501 横浜市保土ヶ谷区常盤台79-2

² 筑波大学

³ 東京学芸大学心理学教室

⁴ 江戸川大学社会学部

⁵ 筑波大学心理学研究科

⁶ (株)ジャパン・マーケティング・エージェンシー

⁷ 本研究は、財団法人女性のためのアジア平和国民基金の助成を受け、福富護を研究代表者として実施された「『援助交際』に対する女子高校生の意識と背景要因」の結果を再解析したものである。なお、マスメディアをはじめとする様々な議論や論説で使用される援助交際という用語には、多義性や曖昧さが含まれており、研究上注意が必要であると考えられたため、本研究では、便宜的に「いわゆる『援助交際』」として、『』付きで使用している。また、本研究の一部は、日本教育心理学会第40回総会において発表されている。

性と非行の間に強い関連があると指摘されており、その背景として、(親に対する)愛情承認欲求の強さ、欲求不満耐性のなさ、自己顕示欲求の強さ等があげられている(例えば、松本, 1995)。また、性行動研究においても、性行動経験の早い者の背景に、非行研究と共通する要因(愛情のない家庭、自己顕示欲求の強さ)や性意識のゆるみ等が存在することが指摘されている(東京都生活文化局, 1982)。

内山(1996)は、性関連福祉犯(売春防止法等の犯罪)の被害者として補導された女子433名(保護群)および、一般の女子中学・高校生584名(一般群)に対して、性の商品化に関する意識や態度を調査している。その結果、保護群の7割以上が、家庭内に何らかの問題を抱えていた。保護群は一般群に比べ、“将来に対して「悲観的な見通し」を持っており、このことが、保護群の自尊感情の消失を促し、性意識の歪みを生じさせ、性の商品化が促進される”と考察している。

また、石橋・石川・月村・里見(1997)は、デートクラブに出入りして補導された女子少年に対して調査を行っている。同調査では、補導少女を、“マスメディアが取り上げるいわゆる「普通の少女」とは言い難く、不良行為レベルにある”者と位置づけている。また、彼女たちはデートクラブ利用後に、罪悪感が強まる一方で、より金銭への執着を強めていたことが明らかにされた。これらの研究結果は、従来の性非行研究の知見の多くと一致しており(例えば、松本, 1995)、『援助交際』の背景要因と、従来の性非行の背景要因とは、多くの部分で共通すると推測される。

しかし、一方で、石橋他(1997)は、上述した調査において、補導少女の家庭環境はそれほど悪くないなど、家庭環境の問題を指摘する従来の研究(例えば、松本, 1995)とは異なる結果も示している。また、近年、携帯電話等の移動通信機器の急速な普及によって、性風俗産業への接触が非常に容易になっていることが問題視

されている。田村・米里・麦島(1996)によると、女子高校生のテレクラ利用経験者の割合は29.3%であり、「テレクラに電話をかける」ことは、もはや逸脱行動とはいえないと指摘されている。さらに、現代青年の性意識については、多くの研究者によって、その規範意識が、近年、全般的に弱まってきていると指摘されている(例えば、矢島, 1997)。

このような時代的变化を考慮すると、従来の性行動・性非行研究では扱われてこなかった要因が、『援助交際』に影響を与えていることが推測される。

例えば、宮台(1998)は、『援助交際』経験の動機として、友人への同調圧力を指摘している。すなわち、「友達がやっているから自分も」という動機である。福富(1997)の面接調査においても、『援助交際』の背景要因として、こうした友人や流行に対する過剰なまでの同調傾向が指摘されている。このような集団への消極的な同調性の強さは、現代青年の特徴をあらわすものと推定されている(上野・上瀬・松井・福富, 1994)。

また、斎藤(1994)によれば、青年期の女子の中に、「寂しき地獄」とも呼ぶべき根源的な不安感を埋め合わせるため、他者との直接的な一体感を求め、その結果、逸脱した性行動をとる者が存在するという。近年、精神医学や臨床心理学の分野では、このような、不安感や虚無感を日常的に感じる青年が、増えてきていることが指摘されている(例えば、町沢, 1993)。

矢島(1997)は、中高生を対象とした性行動に関する調査結果から、近年、性をコントロールする倫理基準が、「愛(愛し合っていればよい)」から「合意(互いに合意していればよい)」へと変化してきているとし、自分本位の考え方が性の領域にも浸透してきていると論じている。こうした自分への関心の集中と、他者に関する無関心は、青年心理学の分野で、現代青年の特徴として論じられているミーイズム(私事主義)と関連すると考えられる(落合・伊藤・齋藤, 1993)。

これらの知見は、現代青年に特徴的な心性が、『援助交際』の背景要因として関与している可能性を示唆している。しかし、これらの要因と、『援助交際』の関連について、実証的に検証した研究は少ない。

以上の論考に基づいて、本研究では、女子青年において、『援助交際』がどのように位置づけられ、それを経験する者の背景にどのような要因が関与しているかを分析する。調査対象者の選定にあたっては、従来の研究の多くが、保護群と一般群の比較や、補導群や経験群の特徴の記述が中心であった点をふまえ、特定の集団に偏らない無作為抽出法を用いる。しかし、東京

⁸ 菊島・松井・福富(1999)では、文献分析によって、『援助交際』のイメージが「喫茶やデート」から「性行為」に至るまで多岐にわたることが示されている。また、菊島らは、首都圏の大学生を対象にして、『援助交際』に対するイメージを自由記述法によって調査を行っている。回答をカテゴリーごとにコード化した結果、「(行為)金銭を媒介として交際する」「(行為)金銭を媒介として性行為・性的行為を行う」「(行為)売春」に対する肯定率は、それぞれ、46.8%、22.2%、14.8%であった。すなわち、本研究と対象年齢の近い大学生における、『援助交際』に対するイメージが、金銭を媒介とする点で共通しているものの、行為としては、交際から性行動(売春)までの、異質の内容を含むものであることが示され、矢島・宮台(1997)の定義を裏付けるものとなっている。

都(1996)の調査からも推測されるように、実際の『援助交際』経験者の割合は、女子青年母集団全体に比して少ないと考えられる。そこで、本研究では、『援助交際』に対する経験の有無に加え、『援助交際』に対する抵抗感についても測定する。また、『援助交際』により近い環境に置かれているかどうかの指標として、友人の『援助交際』の体験談の聴取経験の有無についても測定を行う。これにより、『援助交際』経験のみを扱う場合に比べ、『援助交際』の背景要因について詳細な検証が可能となり、さらに、女子高校生全体における『援助交際』の位置づけが可能になると考えられる。

本研究では、『援助交際』経験・抵抗感に基づいて、回答者の群分けを行い、各群における諸要因の特性の比較を行う。さらに各要因が『援助交際』への態度(経験や抵抗感)にどのように影響しているかを分析する。分析に用いる要因は2つに大別される。第1は、非行規範・家庭環境・学校適応・性意識・賞賛獲得欲求である。これらは、従来、性的逸脱行動の要因として指摘されてきた要因である。『援助交際』経験者や『援助交際』に寛容的な態度をとる者は、非行規範が弱く、家庭環境・学校適応が良好でなく、性に寛容的な意識を有していると予想される。第2は、性的逸脱行動の要因としては、これまで実証的な検証があまりなされていない要因群である。本論文では、金銭への態度(金銭至上主義)、集団への同調(友人同調・流行同調)、他者との関わりを求める心性(ぬくもり希求)と、ミーイズム(関心の狭さ)を取り上げる。『援助交際』経験者や『援助交際』に寛容的な態度をとる者は、これらの要因の特性を、強く持っているとは予想される。

方 法

調査対象・調査方法

調査対象となったのは、首都40km圏内に在住している15歳から18歳までの女子高校生である。以下の手順により単純無作為2段階抽出を行った。対象地域を町丁単位に分けて80地点を無作為抽出し、各地点の住民基本台帳から該当年齢者を12名ずつ無作為抽出した。調査時に、対象者が高校に在学していないことが判明した場合には、対象外とした。調査は、調査員を女性に限定し、訪問留置法・密封回収により行われた。調査期間は1997年10月9日—28日であった。調査対象者960名。有効回答数は600票(有効回答率63.0%)であった。

調査項目

1. 『援助交際』経験・態度 「金品と引き換えにお茶やデートをすること」と「金品と引き換えにセック

スすること」のそれぞれに対して、経験の有無と抵抗感(「抵抗を感じる」「少し抵抗を感じる」「あまり抵抗を感じない」「まったく抵抗を感じない」の4件法)の回答を求めた。

2. 友人の『援助交際』の体験談聴取の有無 友人から「金品と引き換えにお茶やデートをすること」と「金品と引き換えにセックスすること」について、体験談を聞いたことがあるかないかの回答を求めた。
3. 非行規範尺度 内山(1992)を参考に作成した。項目内容は「たばこを吸う」「お酒を飲む」「無断外泊をする」「親の財布からだまって金を持ち出す」「万引きをする」「人のお金や物をおどしてとりあげる」の6項目である。「悪くない」「どちらかといえば悪くない」「どちらかといえば悪い」「悪い」の4件法で回答を求めた。
4. 親への肯定的感情尺度 東京都生活文化局(1996)、上野他(1994)から、親への肯定的態度を示している13項目を選定し作成した。回答は、多重回答形式である。項目は「父は私に対して暖かい」「父は私の気持ちを分かろうとしている」「父は頼りがいがある」「将来父のような生き方をしたい」「父を尊敬している」「母は私に対して暖かい」「母は私の気持ちを分かろうとしている」「母は頼りになる」「将来母のような生き方をしたい」「母を尊敬している」「両親の仲はよその家庭に比べてよい」「親から私は充分愛されていると思う」「将来、両親のような家庭を築きたい」である。
5. 学校適応項目 東京都生活文化局(1996)から引用した。「あなたは学校へ行くのが楽しいですか」の問いに対し、「非常に楽しい」「楽しい」「まあ楽しい」「あまり楽しくない」「全然楽しくない」の5件法で回答を求めている。
6. 性意識項目 東京都生活文化局(1982)から引用した。「結婚するまではセックス(性交)をするべきではない」「婚約者同士なら、セックス(性交)があってもよい」「愛があれば、セックス(性交)が行われてもよい」「愛のないセックス(性交)があってもよい」の中から最もあてはまると思うものひとつに回答するよう求めている。
7. 賞賛獲得欲求尺度 菅原(1986)の賞賛獲得欲求尺度5項目より4項目を選定し、使用した。項目内容は「みんなの人気ものになりたい」「なにか気のきいたことをいって人を感心させたい」「みんなの注目をあびたい」「人まえではいつもかっこよくありたい」である。「あてはまる」「ややあてはまる」「どちらで

- もない」「あまりあてはまらない」「あてはまらない」の5件法で回答を求めている。
8. 友人同調尺度 上野他(1994)の友人への同調に関する4項目を使用した。回答は、多重回答形式である。
9. 流行同調尺度 飽戸(1987)の流行関心スケールを参考にして、本研究で独自に作成した。項目は、「流行のものは買うようにしている」「流行を取り入れるのは楽しいと思う」「流行についての記事や話に関心がある」「流行に乗り遅れるのはいやだ」「バッグや小物は人よりいい物を持っていたい」「友人がいい洋服を着ていると欲しくなる」の6項目である。回答は、多重回答形式である。
10. 金銭至上主義尺度 本研究において独自に作成した。項目内容は、「多少無理をしてでもお金が欲しい」「大金を得るためなら、多少イヤなことでもガマンする」「お金があれば、世の中のほとんどのことは困らないと思う」「人間何をするにも先立つものはお金である」「やっぱり、世の中はお金しだいだと思う」の5項目である。回答は、多重回答形式である。
11. ぬくもり希求尺度 他者との接触を求める尺度として独自に作成した。項目内容は「『だれかにそばにいてほしい』と思うことがある」「『だれかにやさしくしてほしい』と思うことがある」「たまらなくさびしくなることがある」「人のあたたかさがむしょうに欲しくなることがある」の4項目である。賞賛獲得欲求尺度と同じ5件法で回答を求めた。
12. 関心の狭さ尺度 本研究において独自に作成した。項目内容は、「自分が満足していれば、人が何を言おうと気にならない」「他人のために時間やエネルギーを使いたくない」「社会全体のことを考えてもしょうがない」「自分さえよければと思う」「人に迷惑をかけなければ何をしてもよい」の5項目である。賞賛獲得欲求尺度と同じ5件法で回答を求めた。

結 果

尺度構成

非行規範尺度については「悪くないと思う」を1点—「悪いと思う」を4点として得点化した。学校適応項目については、「全然楽しくない」1点—「非常に楽しい」を5点とした。賞賛獲得欲求尺度、関心の狭さ尺度、ぬくもり希求尺度については、「あてはまらない」を1点—「あてはまる」を5点として得点化した。多重回答形式である親への肯定的感情尺度、友人同調尺度、流行同調尺度、金銭至上主義尺度については、項目が

選択された場合を2点、選択されなかった場合を1点とした。得点可能範囲は、親への肯定的感情尺度が13—26点、友人同調尺度が4—8点、流行同調尺度が、6—12点、金銭至上主義尺度が5—10点である。性意識項目については、回答分布を検討して、「結婚するまではセックス(性交)をするべきではない」「婚約者同士なら、セックス(性交)があってもよい」を3点、「愛があれば、セックス(性交)が行われてもよい」を2点、「愛のないセックス(性交)があってもよい」を1点として得点化した。各尺度について信頼性係数を算出した結果、非行規範尺度 $\alpha = .76$ 、親への肯定的感情尺度 $\alpha = .85$ 、流行同調尺度 $\alpha = .66$ 、友人同調尺度 $\alpha = .61$ 、賞賛獲得欲求尺度 $\alpha = .86$ 、金銭至上主義尺度 $\alpha = .65$ 、ぬくもり希求尺度 $\alpha = .89$ 、関心の狭さ尺度 $\alpha = .70$ であった。

『援助交際』の経験と抵抗感

回答者(N=600)全体の中で、『援助交際』(「金品と引き換えに、お茶やデートを行うこと」と「金品と引き換えに、セックスをすること」のいずれかまたは両方)を経験しているものの割合は5.0%(N=30)であった⁹。友人の『援助交際』の体験談の聴取経験別に、体験談あり群(「お茶やデート」「セックス」のいずれか一方でも聞いたことがあると回答した者)と体験談なし群に分け、「金品と引き換えに、お茶やデートを行うこと」と「金品と引き換えに、セックスをすること」に対する抵抗感の割合を比較した(TABLE 1, TABLE 2)。その結果、「お茶やデート」に関しては回答者全体の6割以上が、「セックス」に関しては約9割が、それぞれ「抵抗を感じる」と回答していた。また、体験談あり群は、体験談なし群にくらべ、「お茶やデート」と「セックス」の両方において、「抵抗を感じる」割合が少なかった。

『援助交際』への態度による群分け

『援助交際』に対する態度による特徴の違いを見るため、『援助交際』経験と抵抗感に対する回答に基づいて、以下の手続きにより群分けを行った。まず、「金品と引き換えに、お茶やデートを行うこと」と「金品と引き換えに、セックスをすること」のいずれかまたは

⁹ 『援助交際』経験群として設定した30名の経験別の内訳は次のとおりである。『援助交際(お茶)』経験ありと回答したものは29名おり、『援助交際(セックス)』経験のあるものは13名、『援助交際(セックス)』経験のないものは14名であり、2名は無回答であった。また、セックス経験のある14名の中で、『援助交際(お茶)』経験のあるものは、13名で、『援助交際(お茶)』経験なしと回答したものは1名にとどまっていた。すなわち、『援助交際(お茶)』のみを経験しているものは14名であり、『援助交際(セックス)』のみを経験しているものは1名であった。

TABLE 1 「金品と引き換えにお茶やデートをすること」に対する抵抗感の割合 (%)

	N	抵抗を感じる	少し抵抗を感じる	あまり抵抗を感じない	抵抗を感じない
全体	560	63.4	21.8	11.4	3.4
体験談あり	216	44.4	26.9	22.2	6.5
体験談なし	344	75.3	18.6	4.7	1.5

$\chi^2=69.789$ $df=3$ $p<.001$

TABLE 2 「金品と引き換えにセックスをすること」に対する抵抗感の割合 (%)

	N	抵抗を感じる	少し抵抗を感じる	あまり抵抗を感じない	抵抗を感じない
全体	557	89.0	7.4	2.7	0.9
体験談あり	215	80.9	13.0	4.7	1.4
体験談なし	342	94.2	3.8	1.5	0.6

$\chi^2=23.796$ $df=3$ $p<.001$

両方を経験している者を経験群とした。また、経験群以外の者(非経験者)のうち、「金品と引き換えに、お茶やデートを行うこと」に対して、「少し抵抗を感じる」「あまり抵抗を感じない」「まったく抵抗を感じない」と回答した者を弱抵抗群とし、「抵抗を感じる」と回答した者を強抵抗群とした。なお、以上の非経験者を2群に分ける手続きは、回答者を強抵抗群に含める基準が最も厳しくなるよう考慮して、採択した。

これら経験群・弱抵抗群・強抵抗群の割合は、学年間において有意な差がみられ ($\chi^2=13.65$, $df=4$, $p<.05$), 学年が上がるほど経験群の割合が増加していた (TABLE 3)。

『援助交際』経験・抵抗感における非行規範意識

経験群、弱抵抗群、強抵抗群における非行規範意識尺度得点を TABLE 4 に示す。各群間で非行規範意識尺度得点の平均値の差の検定 (一元配置分散分析) を行った結果、0.1%水準で有意差がみられた。多重比較 (Scheffe

TABLE 3 学年別の経験群・弱抵抗群・強抵抗群の割合 (%)

	N	経験群	弱抵抗群	強抵抗群
1年生	185	1.6	32.4	61.1
2年生	206	3.9	32.0	60.2
3年生	209	9.1	25.8	59.8

TABLE 4 経験群、弱抵抗群、強抵抗群の非行規範意識尺度得点

	経験	弱抵抗	強抵抗	F値/(df)	多重比較
非行規範意識	15.77 (5.57)	18.75 (4.23)	21.00 (3.16)	90.84*** (2,568)	経<弱<強

*** $p<.001$ ()内は標準偏差
注 多重比較の経・弱・強は、それぞれ経験群・弱抵抗群・強抵抗群を示す。

の方法)の結果、すべての群間に有意差が見られ、強抵抗群が最も高く、以下弱抵抗群、経験群の順に低くなっていた。

各群の特徴

各要因について、経験群、弱抵抗群、強抵抗群にそれぞれどのような差があるのか検討するために、9尺度得点の平均値の差の検定 (一元配置分散分析) を行った (TABLE 5)。その結果、すべての尺度において有意な差がみられた。それぞれの尺度について、多重比較 (Scheffeの方法) を行ったところ、まず、親への肯定的感情得点は、強抵抗群が、弱抵抗群と経験群に比して高かった。学校適応得点は、強抵抗群が弱抵抗群に比して高かった。性意識得点については、強抵抗群が最も高く、弱抵抗群、経験群の順に低くなっていた。友人同調得点は、経験群が強抵抗群に比して高かった。賞賛獲得欲求得点については、経験群が、弱抵抗群と強抵抗群に比して高かった。流行同調得点、金銭至上主義得点、ぬくもり希求得点、関心の狭き得点については、経験群が最も高く、弱抵抗群、強抵抗群の順に低くなっていた。

『援助交際』経験・抵抗感の背景要因

どのような要因が、直接的に『援助交際』の経験・抵抗感に影響を与えているかについて検証するため、以下の手順で重回帰分析を行った。まず、『援助交際』経験群に3点、『援助交際』弱抵抗群に2点、『援助交際』強抵抗群に1点をそれぞれ与えて『援助交際』態度得点とし、これを基準変数とした¹⁰。説明変数として用いたのは、非行規範意識尺度を除いた9尺度である。

TABLE 5 経験群、弱抵抗群、強抵抗群の各尺度得点

	経験	弱抵抗	強抵抗	F値/(df)	多重比較
親への肯定的感情	16.64 (3.05)	17.22 (3.45)	18.67 (3.60)	11.76** (2,530)	経、弱<強
学校適応	2.37 (1.02)	2.18 (1.00)	2.50 (1.03)	5.77** (2,566)	弱<強
性意識	1.67 (0.60)	1.98 (0.47)	2.24 (0.50)	30.52** (2,552)	経<弱<強
友人同調	5.87 (1.22)	5.38 (1.32)	5.10 (1.11)	7.91** (2,569)	経>強
賞賛獲得欲求	15.63 (3.14)	13.43 (3.19)	12.86 (3.69)	9.38** (2,562)	経>弱、強
流行同調	9.50 (1.83)	8.33 (1.62)	7.56 (1.50)	29.58** (2,569)	経>弱<強
金銭至上主義	7.57 (1.55)	6.46 (1.42)	5.95 (1.23)	26.35** (2,569)	経>弱<強
ぬくもり希求	21.89 (3.02)	18.74 (4.54)	16.69 (5.09)	22.17** (2,565)	経>弱<強
関心の狭さ	15.17 (4.27)	12.94 (3.76)	11.83 (3.50)	15.08** (2,564)	経>弱<強

** $p<.01$ * $p<.05$ ()内は標準偏差
注 多重比較の経・弱・強は、それぞれ経験群・弱抵抗群・強抵抗群を示す。

重回帰分析は、変数増加法を用い、投入された変数の偏回帰係数の有意性(5%水準)の基準で変数の増加を打ち切った。投入された変数と標準偏回帰係数を TABLE 6 に示す。解析の結果、説明率は21.1%で、説明率の検定は、0.1%水準で有意であった ($F=25.20, df=6,507$)。流行同調尺度、性意識尺度、ぬくもり希求尺度、金銭至上尺度、親への肯定的感情尺度、関心の狭さ尺度が、有意な説明変数として採用された。すなわち、親への肯定的感情得点と性意識得点は、『援助交際』態度得点を低める要因として働き、流行同調得点、ぬくもり希求得点、金銭至上主義得点、関心の狭さ得点は『援助交際』態度得点を高める要因として働いていた¹¹。

¹⁰ 群分けの際に用いた、『援助交際』の経験(「お茶やデート」と「セックス」の2種)の有無と、抵抗感(「お茶やデート」と「セックス」の2種)の構造を検討するために、数量化第III類によって分析を行った。解析に当たっては、抵抗感の回答を、「抵抗を感じる」と「少し抵抗を感じる」「あまり抵抗を感じない」「抵抗を感じない」に2分し、4項目8カテゴリーを投入した。分析の結果、得られた固有値は、順に.53, .24となった。第1成分と第2成分のカテゴリースコアプロットを FIGURE 1 に示す。FIGURE 1 より、第1軸プラス側(図右側)から第1軸マイナス側(図左側)にU字型にカテゴリーが並んでおり、これらのカテゴリーが1次元性を有していることが確認された。これは、一般に、ガットマンスケールをなす1-2 データを数量化III類によって解析した結果、1軸と2軸のカテゴリースコアがU字型を成した場合、それらのカテゴリーは1次元構造を成していると推定される事実に基づいている(柳井・高根, 1977)。この結果は、「お茶やデート」と「セックス」が回答者の意識と行動においては、一連の行為と認識されており、抵抗感と経験が連続体上に位置づけられることを示している。『援助交際』態度得点として、強抵抗群に1点、弱抵抗群に2点、経験群に3点を与えるという得点化方法は、恣意性が含まれるが、連続変数として扱うことによって、『援助交際』経験に至る(『援助交際』に対する抵抗感が減少し、実際『援助交際』を行なうまでの)段階的な流れを統計的に検証することが可能になると判断し、本文中の手続きを採用した。

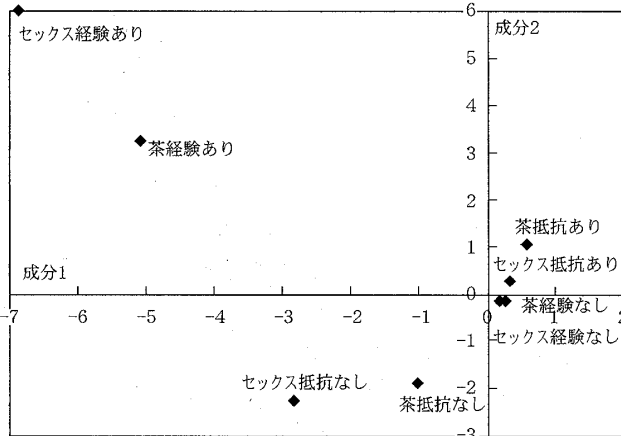


FIGURE 1 『援助交際』に対する経験と抵抗感の構造

TABLE 6 『援助交際』態度得点を基準変数とした重回帰分析

説明変数	β	r
流行同調	.19**	.31**
性規範意識	-.18**	-.32**
ぬくもり希求	.14**	.22**
金銭至上主義	.13**	.28**
親への肯定的感情	-.13**	-.19**
関心の狭さ	.09*	.23**
重相関係数	.46**	

N=514 ** $p<.01$ * $p<.05$
 β は標準偏回帰係数, r は相関係数

考 察

『援助交際』(金品と引き換えに性行為やお茶やデートをすること)を経験したことがある者の回答者全体における比率は、5%であり、東京都(1996)による調査結果(4.6%)と、同程度の割合であった。『援助交際』経験者の割合は、学年が上がるにつれて増加していた。また、回答者の6割以上が、金品と引き換えにお茶やデートにつきあうことに対して抵抗感を持っていた。

友人の『援助交際』の経験談を聞いたことがある者は、『援助交際』への抵抗感が低かった。この結果は、『援助交際』経験のある友人の存在が、回答者自身の『援助交際』に対する抵抗感を低減させていることを示唆しており、福富(1997)や宮台(1998)の知見を支持する結果となった。

本研究では、『援助交際』の背景要因として2種類の要因を設定し、『援助交際』の経験や抵抗感との関連を検証した。

第1の要因群は、従来性非行・性行動研究で指摘されている要因であるが、まず、『援助交際』に対して寛容的な態度を示している者ほど、非行行為や性(行為)に対して寛容的な態度を有していた。この結果は、性と非行の間に顕著な関連がみられた従来の指摘(例え

¹¹ 「お茶やデート」「セックス」の2種類の行動経験や態度によって、影響する要因が異なっているかを検討するために、さらに以下の分析を行った。「お茶やデート」経験群に3点、「お茶やデート」弱抵抗群に2点、「お茶やデート」強抵抗群に1点を与えた『援助交際(お茶)』態度得点を基準変数とした、重回帰分析(説明変数は本文中の9尺度)と、「セックス」経験群に3点、「セックス」弱抵抗群に2点、「セックス」強抵抗群に1点を与えた『援助交際(セックス)』態度得点を基準変数とした、重回帰分析(説明変数は本文中の9尺度)の両者の結果を比較した。その結果、「お茶やデート」においては、本文中と同様の要因が採択された。「セックス」においては、有意な要因として採択されたのは、性規範意識、金銭至上主義、関心の狭さの3要因であり、「セックス」のみに、影響する要因は見られなかった。

ば、松本, 1995) と一致しており、非行規範と性意識が、『援助交際』の経験や抵抗感の低減に影響を与える要因であることが立証された。また、『援助交際』に対する抵抗感の弱い者は、抵抗感の強い者に比べ、親に対して肯定的感情を持たず、学校に対して適応感を持っていなかった。また、『援助交際』経験者は、他者からほめられたり、他者より目立ちたいと思う傾向が顕著に強かった。

第2の要因群は、従来、性的逸脱行動の要因として、実証的に検証されていない要因や、現代青年に特徴的な心性として指摘されている要因であった。分析の結果、『援助交際』への態度が寛容な者ほど、流行に追従する意識が強く、金銭を最優先に考える傾向が強く、自分以外のことには関心が少なく、寂しさを埋め合わせるために他者への接触を求める傾向が強いことが明らかとなった。また、経験者と抵抗感の低い者は、友人と同じように行動する傾向が強いことが明らかとなった。

さらに、重回帰分析の結果により、『援助交際』への態度に直接影響を与えている要因を検討した。その結果、従来指摘されている要因のうち、親への肯定的感情と性意識が、『援助交際』に対する態度を直接規定する要因であることが明らかとなった。また、現代青年に特徴的な心性の要因の中では、流行同調意識、ぬくもり希求、金銭至上主義、関心の狭さが直接的な要因として働いていることが示された。

本研究の知見は以下の2点にまとめられる。第1に、『援助交際』を経験する者や、『援助交際』に対する抵抗感が弱い者の背景には、従来、性非行や性行動経験の早い者の背景として指摘されていた要因が、共通して存在することである。特に、家庭環境と性意識については、『援助交際』の態度に直接的に影響を与えていた。すなわち、家庭環境の良好さと適切な性意識が、性的逸脱行動を抑制するという従来からの知見が、現代の性的逸脱行動としての『援助交際』に対しても適用されることが立証された。

第2に、現代青年に特徴的と指摘されている心性が、『援助交際』の態度に大きく関与し、影響を与えていた。特に、寂しさを埋め合わせるために他者との関わりを求める傾向、流行に追従する意識、金銭を最優先に考える傾向、自分以外への関心の欠如に関しては、『援助交際』の態度に直接的に影響を与えていた。すなわち、『援助交際』の背景要因を捉える上で、従来からの知見のみにとどまらず、現代青年に特徴的な心性を、性的逸脱行動の背景要因として捉える必要性が明らかと

なった¹²。

以上の結果から、女子高校生が『援助交際』に至る流れを推定すると、以下ようになる。まず、周囲の環境(家庭環境・学校環境)に対する不適応感が強まり、非行や性に関する規範意識が弱まる(非行規範・性意識)。また、友人の体験談を聞くことにより、『援助交際』への抵抗感が低減する。抵抗感の低減とともに、流行に同調する意識、金銭を重視する意識、他者との関わりを求める意識や、自己中心的な傾向が強まる。その中で、友人より抜きん出たいという意識(賞賛獲得欲求)の強い者が、実際の『援助交際』経験に至るものと考えられる。

また、『援助交際』への態度に直接的に影響を与えている要因については、最近、臨床心理学等の分野で指摘されている根源的不安感や空虚感の視点から捉えることができると考えられる。この根源的不安感や空虚感は、ありのままの自分自身を受け入れてもらう体験の欠如によって引き起こされるといわれる(例えば、町沢, 1993)。『援助交際』経験者や『援助交際』に抵抗感を抱かない者は、このような自分自身を受け入れてもらう体験が欠如していたり、少ないと考えられる。すなわち、不安感や空虚感から逃れるために、自分自身を直接的に受け止めてくれる対象を求めたり(ぬくもり希求)、自らを周囲に同調させることで、不安感を解消させようとした(流行同調)、自分のことで精一杯で余裕がなく(関心の狭さ)、目先の享乐的なもの(金銭至上・性意識)にとどまらざるを得ないものと推定される。

本研究の問題点としては、まず、本研究で使用した尺度が、独自に作成されたものが多く、信頼性の低い尺度がいくつか見られたことがあげられる(流行同調・金銭至上主義)。特に、流行同調尺度には、「バッグや小物は人よりもいい物を持っていたい」など、調査対象者が限定される項目が含まれており、これらの点については、今後、項目内容の検討が必要であると考えられる。

引用文献

- 飽戸 弘 1987 社会調査ハンドブック 日本経済新聞社
 深谷和子・三枝恵子・小原孝久 1998 援助交際 モノグラフ・高校生'98, 52 ベネッセ教育研究所
 福富 護 1997 いわゆる『援助交際』に対する女子高校生の意識および背景要因の分析的研究 (劬女

¹² 深谷・三枝・小原(1998)においても、『援助交際』経験群に、流行への関心の強さ、規範意識の崩れ、家庭環境の不安定さがみられる等、本研究と同様の結果が得られている。

- 性のためのアジア平和国民基金
- 石橋昭良・石川ユウ・月村祥子・里見有功 1997 デートクラブ等に出入りする少女の実態と性意識 犯罪心理学研究, **35** (2), 48—59.
- 菊島充子・松井 豊・福富 護 1999 『援助交際』に対する態度—雑誌や評論の分析と大学生の意識調査から— 東京学芸大学紀要第1部門, **50**, 47—54.
- 町沢静夫 1993 ボーダーラインの心の病理 創元社
- 松本良枝 1995 非行少女と立ち直り 大日本図書
- 宮台真司 1998 援助交際 尾木直樹・宮台真司 学校を救済せよ 学陽書房, Pp.160—193.
- 落合良行・伊藤裕子・齋藤誠一 1993 ベーシック現代心理学4 青年の心理学 有斐閣
- 斎藤茂男 1994 現代女子高校生の心象を語る こころの科学, **56**, 18—22.
- 菅原健介 1986 賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求—公的自意識の強い人に見られる2つの欲求について— 心理学研究, **57**, 134—140.
- 東京都生活文化局 1982 大都市高校生の性をめぐる意識と行動—その実態と生活環境・心理的特徴な
- どとの関連— 同局発行
- 東京都生活文化局 1996 中学・高校生の生活と意識に関する調査(中間報告) 同局発行
- 田村雅幸・米里誠司・麦島文夫 1996 中学・高校生のテレホンクラブへの接触と社会適応状況 科学警察研究所報告防犯少年編, **37** (1), 48—59.
- 内山絢子 1992 性関連の福祉犯被害者の規範意識 犯罪と非行, **92**, 26—52.
- 内山絢子 1996 性の商品化についての少女の意識に関する研究 科学警察研究所報告防犯少年編, **37** (2), 69—81.
- 上野行良・上瀬由美子・松井 豊・福富 護 1994 青年期の交友関係における同調と心理的距離 教育心理学研究, **42**, 21—28.
- 矢島正見・宮台真司 1997 現代若者文化と性行動—援助交際を手がかりに— 犯罪心理学研究, **35** (特別号), 154—157(抄録).
- 矢島正見 1997 現代青少年の性意識 犯罪と非行, **115**, 26—48.
- 柳井晴夫・高根芳雄 1977 多変量解析法 朝倉書店 (1999.2.1 受稿, 2001.1.22 受理)

Background Factors of Amateur Prostitution ("Enjo-Kousai") in Japanese High-School Girls

TAKAHIRO SAKURABA (GRADUATE SCHOOL OF EDUCATION, YOKOHAMA NATIONAL UNIVERSITY),

YUTAKA MATSUI (INSTITUTE OF PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA), MAMORU FUKUTOMI (TOKYO GAKUGEI UNIVERSITY),

KENICHI NARITA (TOKYO GAKUGEI UNIVERSITY), YUMIKO KAMISE (EDOGAWA UNIVERSITY COLLEGE OF SOCIOLOGY),

MIYOKO UI (DOCTORAL PROGRAM IN PSYCHOLOGY, UNIVERSITY OF TSUKUBA), MICHIKO KIKUSHIMA (JAPAN MARKETING AGENCY)

JAPANESE JOURNAL OF EDUCATIONAL PSYCHOLOGY, 2001, 49, 167—174

The present study aims to clarify factors causing amateur prostitution (in Japanese, "enjo kousai": enjo = support ; kousai = dating) in adolescent females. The definition of "enjo kousai" is paid serial sexual behavior. Currently in Japan, this is considered a deviant sexual behavior for adolescent females. Completed questionnaires from 600 randomly sampled high school girls were sorted into 3 groups : experienced, mildly resisting, and strongly resisting. The findings were as follows : (1) young women's attitudes toward amateur prostitution were influenced by their friends' experiences with that behavior ; (2) engaging in amateur prostitution was strongly correlated with delinquency ; and (3) the group that had engaged in amateur prostitution expressed a strong desire to receive compliments from others or wanted to be viewed by others as outstanding. The results indicated that the adolescent girls who had engaged in amateur prostitution or those who had little resistance to doing so showed the same factors as adolescent girls who were sexually delinquent or sexually active. The typical psychological characteristics of contemporary young people in Japan strongly relate to their attitudes toward amateur prostitution.

Key Words : amateur prostitution, "enjo kousai", sexual behavior, delinquency, contemporary adolescents